山本義隆著
『重力と力学的世界』( )
古典としての古典力学』
(現代数学社)

本には積読(つんどく)とい
う読み方もあると知ったのは、
大学生のときだった。
一回生のとき、理学部の友人
の下宿で雑談していた。古木屋
をめぐったと思しき数学書が山
と積まれた下宿。「ふーん、F君
は数学科に進むんだ」と言った
私の一言に対する彼の言葉が天
啓だった。「いや、まだ決めてな
いよ。でも、本ってこういつう
に買うものでしょう」

そう、手にとって読むのが最
初のおつきあいだけれど、近く
においてその本の存在を毎日感
じながら生活するのも、大事な
本のつきあい方なのだ。その
日以来そう考えるようになった。
買う時点では、身の丈に合わ
ない難解な本でも、とにかく購
入して自分のものにして、背表
紙とだけでも毎日付き合ってい
るうちに少しずつ自分とその本
との距離が縮まってくる。そう

いうものなのである。
本書は、当代随一の科学史家
による本格的な物理学史である。
近代の自然観を準備したニュー
トン力学と、ニュートンその人
の力学との差異を、原論文にあ
たって精査・検証。「重力」概念
を軸に力学的自然観の
形成過程を論じている。
時に今の自分には合
わない難解な書物と格
闘することも読書の楽
しみの一つです。貴重
書ながら、版元品切れ
の本書も、北野の図書
館にはあります。とにかく、手
にとってみてください。

読書案内

金水 敏著
『ヴァーチャル日本語
役割語の謎』(講談社)

私は大学に入るまで「国語学」
という学問に触れたことがなか
った。大学での金水先生の講義
は、普段何気なく使っている言
葉もよく考えてみると分からな
いことやおもしろいことがたく
さんあると気づかせてくれる、
楽しいものだった。そのため金

水ゼミは人気があったが、一旦
ゼミに入って先生の学問に対す
る厳しさを知ると脱落していく
学生も多かった。この本を讀ん
でいたら、そんな学生時代を思
い出した。
「役割語」とは「あるカテ
ーリーの人物を思い浮かべた時、
その人物がいかにもしゃべりそ
うな言葉」のことで、マンガや
芝居のセリフに見られる。手塚
治虫のマンガに登場する博士は
「そうじゃ」「わしが博士じゃ」
などと話す。現実にはこんな
博士はいない。なぜマンガに出
てくる博士はこんなしゃべり方
をするのだろう?どこからこん
な言い方が生まれてきたんだろ
う?この本ではそんなことから
話が始まり、気付いたらいつの
間にか専門的な国語史の話に入
り込んでいる。こつした口当た
りの良さや専門性を併せ持った
ところが先生の良さなんだろう
と思う。金水先生は北野の八十
七期生なのだが、先生のこうい
う絶妙なバランス感覚は北野で
培われたものなのかもしれない
と思ったりする。
お蝶夫人(注)の「よろしく

つてよ」という話し方や、「おら
幸せだべさ」という田舎者のセ
リフの謎も、この本を読めば解
明できます。

ウォルター・ワリンゲン著
中村明子訳

『小説』聖書』旧約編』( )

『小説』聖書』新約編』( )

(徳間書店)

石黒マリーローズ著

『聖書でわかる英語表現』

(岩波新書)

小学5年生の時、九州の小倉
に引っ越した。緊張した。友達
ができるまでは寂しかった。そ
のうち、友達ができた。「風と共
に去りぬ」のヴィヴィアン・リ
ーに似た美人だった。彼女はク
リスチャンだった。なんとなく
かっこいいと思った。彼女に憧
れた。日曜礼拝に誘われた。わ
けもわからずついて行った。優
しい神父さんが(新約)聖書を
下さった。毎週日曜日の朝には
礼拝に行った。お説教はチンプ
ンカンブンだった。それでも教
会の荘厳な雰囲気魅せられた。
私と聖書の出会いはこんな

い加減なものであった。それで
も時々、頂いた聖書を読んでみ
たりもした。1頁を読み終える
までもなく本を閉じること数度、
そのうち、聖書は本棚の中を飾
るだけになってしまった。そん
な私が貪るように読んだのが、
この「小説『聖書』」である。兎
に角、面白い。信仰心のある人
もない人も、波瀾万丈の人間ド
ラマとして楽しめる小説として
出来上がっている。聖書は実は
ドラマなのだ。

その聖書が言語にいかにか深く
根ざしているかを説明してくれ
ているのが、「聖書でわかる英
語表現」である。記事や「ニュー
ス」の中で用いられている簡単な
単語も聖書の背景を持っている
こと、実は奥深い単語に変身
するという事例を取り上げてく
れている。目からウロコである。
著者はレバノンに生まれ、混乱
の続く祖国を気にかけてながら日
本で教鞭をとっている女性。そ
んな彼女の文章からは、神への
感謝と世界の平和を願う気持ち
が伝わってくる。読んでいる者
を敬虔な気持ちにさせてくれる
そんな書物である。

図書分類番号 423-Y3-1 193-W2-2 193-W2 1 837-I3-1

ステイヴン・( )
 オッペンハイマー著
『人類の足跡 10 万年全史』
 (草思社)

あなたの DNA は父親から 2 分の 1 を引き継いでいる。そして祖父からは 4 分の 1、曾祖父からは 8 分の 1、十代前の先祖からは 1024 分の 1、二十代前の先祖からは 1048576 分の 1、百代前の先祖からは、単純に計算するならば何と分母の数字は三十桁を超える。だから「百代に亘り脈々と続く血統」とは言っても、百代前の「ご先祖様と現代の子孫とは DNA の上では殆ど縁がない」と言うてよい。

しかし、あなたの体の中には別種の DNA が存在する。ミトコンドリア DNA である。これは母親からしか引き継がれない(女性にしか引き継がれない)ということではない。あなたのミトコンドリア DNA は母親と同じであり、母方の祖母とも同じであり、百代前の母方の先祖の女性ともほぼ同じである。あな

たとあなたの友人のミトコンドリア DNA が同じならば、それは先祖の女性を共有しているということになる。そして、現代の地球上の全ての人間は最終的にはアフリカの一人の女性を祖先としている。

これまでの人類の系統樹は、考古学・人類学などによって描かれてきた。しかし、二十一世紀になって新たに分子生物学による人類の系統樹が描かれるようになった。本書には考古学や人類学の知見をふまえ、DNA をもとにした人類の系統樹と人類のアフリカからの移動史が描かれている。こんなことができようになったのか。

岡田晴恵 田代眞人著
『新型インフルエンザ H5N1』(岩波書店)

新型インフルエンザとは？
 現在、世界の広い地域で H5N1 型鳥インフルエンザの流行が拡大している。この H5N1 型鳥インフルエンザのウイルスが変化して、新型インフルエンザとして、ヒトの世界で大流行を

起こす危険性が、国連や研究者によって、強く叫ばれている。H5N1 型新型インフルエンザのウイルスとは、どのようなウイルスなのか。また、H5N1 型新型インフルエンザとはどのような感染症なのか。本書では、それが、最新の知見で科学的に明らかにされる。

H5N1 型高病原性鳥インフルエンザウイルス感染によるヒトの病気は、私たちに馴染みの深いインフルエンザという呼吸器疾患ではなく、人類が初めて経験する重症の新興感染症であることを、まず明確にしておく必要があると、著者は言う。ヒトにおける H5N1 型インフルエンザウイルス感染症には「インフルエンザ」ではなく、全く別の病名を用いる必要があると、とまで言っている。

今必要なのは、H5N1 型鳥インフルエンザウイルスを、科学的に正面から見すえ、この鳥型ウイルスがどのような性質の新型ウイルスに変化していくのか、その可能性を科学的に直視して見極め、危機管理、国家安全保障の問題として、最善の準

備対策を早急に講ずることであると、結んでいる。

オルハン・パムク著 ( )
 和久井路子訳
『わたしの名は紅』(藤原書店)
 ウンベルト・エーコ著 ( )
 河島英昭訳
『薔薇の名前』(東京創元社)

中学生くらいからミステリにはまり、アガサ・クリスティーや綾辻行人などをよく読んだ。今回は、ミステリとは言い切れないが、それに近いと思われる作品を紹介する。

まずは、『わたしの名は紅』。二〇〇六年にノーベル文学賞を受賞したオルハン・パムクの作品だ。一五九一年のオスマン帝国・イスタンブルにおける、九日間の出来事を描く。レパントの海戦で敗北し、帝国が西洋への畏れを感じ始めた時代、細密画の作成に西洋の技法(肖像画の技法を探り入れるかどうか)をめぐる、殺人事件が発生する。世界史を学べばわかるが、当時のイスラム世界で肖像を描くのは、神様アラーに対する冒瀆に近い。作品はすべて一人称で書かれ、読み進むにつれて、事件を構成するパズルのピースが揃っていき、「いまや死体だ、わたしは、屍だ、この井戸の底で」と、死者が語り出す冒頭も印象的だ。

『薔薇の名前』は私が大学時代に読み耽った作品で、中世の修道院を舞台とする殺人事件物語の背景には、バビロン捕囚中の教皇・アリストテレスの著作・ドミニコ会の異端審問などが絡んでおり、高校で世界史を学んだ者でも、完全な理解は難しい。しかし、図書館の奥に隠された秘密の書物・部屋、それを解くための暗号など、謎解き要素も満載で、読後の満腹感がある。たった七日間の出来事を描いているが、何年もかかって事件を解決したような感じだ。

紹介した 2 作品のうち、後者は映画化もされた。前者は映画化すると、一人称で書かれた作品独特の雰囲気壊れてしまっただろう。

(注) 山本鈴美香。『エースをねらえ!』の主要登場人物の一人